

Title	享保年間ノ米價調節(二、完)
Author(s)	本庄, 榮治郎
Citation	經濟論叢 (1915), 1(4): 582-595
Issue Date	1915
URL	https://doi.org/10.14989/126910
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷一第

論說

- 收益ト生産費トノ關係
- 專賣ト戰後財政
- 經濟學認識論ノ若干問題(二、三)

雜錄

- 危險分散主義ノ原則
- 經濟主義ニ就テ
- 英吉利ノ農政問題(二、三)
- 享保年間ノ米價調節(二、三)

雜報

- 經濟の進化ト人口法則(二)
- 戰爭利得稅新案
- 獨逸帝國全體ニ亘ル半官企業組織新說
- 英國ノ戰費ト經濟
- 獨逸ノ植民の運動ノ回想
- 相續稅ト家族制度
- 本多利明ノ著書ニ就テ
- こんらーど教授逝ク

法學博士	河上肇
法學博士	小川郷太郎
商學士	左右田喜一郎
法學博士	神戸正雄
法學博士	戸田海市
助教授	河田嗣郎
法學士	本庄榮治郎
講師	米田庄太郎
法學博士	小川郷太郎
法學博士	神戸正雄
助教授	河田嗣郎
助教授	山本美越乃
法學博士	神戸正雄
法學士	本庄榮治郎
助教授	河田嗣郎

享保年間ノ米價調節 (三、完)

法學士 本庄 榮治郎

總論——享保十五、六年ノ引上策(以上前號所載)——享保十七、八年ノ引下策——同二十、二十二年ノ引上策——結言

第二章 享保十七、十八年ノ米價引下策

第一節 享保十七年ノ引下策

享保十七年ニ至リ九月以後一時ニ米價暴騰シ、米一石百二十目ヨリ百五十目ニ上リシガ、(三貨圖彙)ソノ原因ハ同年七月始ヨリ西國、中國、四國方面蝗害アリテ不熟凶作甚シカリシニ依ル。前述ノ如ク多大ノ努力ヲ費セル買米ハ二十匁内外ノ騰貴ヲ齎シタルモ、今ヤ虫害ハ之ニ五倍スルノ結果ヲ示セリ。思フテ茲ニ至レハ、米價ノ人爲的引上ノ效果ハ遂ニ自然ノ出來事ニ比シテ殆ント言フニ足ラサル也。而シテ前ニハ米價ノ安キニ苦ミシ幕府ハ今ヤ又却テ米價ノ高キニ窮シ引上策ハ忽チ一變シテ引下策ヲ講セサル可ラサルニ至レリ。然ラハ如何ナル手段ニ出テシヤトイフニ、コノ凶作ノ爲メニ物成半減以上ノ諸侯ニ對シ官金ヲ貸與シ、又虫害地ニ拂下米ノ輸送ヲナセルコト頗ル多カリシガ、(草間伊助筆記)コレ等ハ凶荒賑恤ノ爲メニセルモノト見ルヘク、必スシモ米價調節策トシテ認ムルコトヲ得サルカ如シ。ソノ調節策トシテ行ハレタルモノハ、主トシテ廻米ノ増加ヲ計ラントスルノ方法是レ也。九月朔日ノ令ニ曰ク(德川十五代史)

西國四國中國筋作物ニ出附米拂底之中ニ候依之北國、出羽、陸奥、駿河、遠江、三河、尾張、美濃、伊勢邊領知有之面々上

方ニ米相廻候儀只今迄モ可相廻候得共、彌今年ハ可成程ハ多ク大阪ニ成共右之所々ニ成共、勝手次第可被廻候、賣買ノ者米ナモ其趣ニテ廻シ候様ニ可被申付候以上。右之趣萬石以下共可被相觸候。

トテ北國東國諸侯及ヒ町人所有米ノ廻送ヲ促セリ。カクテ本年西國米ノ大阪登リ高僅ニ二十二萬五千三十二石、米價甚貴ク一石百二十五匁ヲ唱ヘシガ、九月、十月ニ及ンテ北國米二百三十石餘東國米八十七萬八千石餘廻送セラレ、米價ヤヤ緩和セシカ如シト雖、西國、四國、五畿内各地米拂底ニシテコレ等ノ廻米モ多ク各地ニ轉送セラレ濱方越年米僅カニ十八萬九千七百俵ニ過キサリシトイフ(三貨圖鑑、草 問伊助筆記)

第二節 享保十八年引下策

米價ハ依然高直ヲ維持シツツ享保十八年ニ入リシガ、幕府ハ前年來ノ廻米政策ヲ續行シ正月及ヒ二月ニハ、

『白米奥州并關東八州ヨリ江戸表ニ相廻シ候義無用之段去々々年相觸候得共、前々之通右白米江戸表ニ差出候儀不苦候間勝手次第相廻シ候様ニ奥州關八州ニモ此度相觸候、江戸米屋共前々之通心得白米引請可致商賣候』(古事類苑)

トイヒ、五月二十日ニハ、

『大阪米相場上リ候ニ付、北國筋米之儀先達而相違候通大阪表ニ彌相廻拂可申候』(徳川禁令考、憲教類典)

ト觸達スル所アリシガ、コノ外更ニ種々ノ方法ヲ講シテ米價ノ引下ヲ計レリ。今ソノ主ナルモノヲ擧クハレ左ノ如シ。

(イ) 米ノ買締、買置禁止及ヒ買置米ノ賣出命令。米價ノ下落ヲ策スルニハ、消費、交易ノタメニ市場ニ提供セラルル米量ヲ多クスルコト最モ必要ナルヘシ。タトヘ廻米ヲ獎勵スル所アルモ廻米カ少數者ノ手ニ買占メラレ、又ハ買置米トナリテ消費又ハ交易ノタメニ市場ニ提供セラルル

ニ至ラスンバ米價ハ之レカ爲メニ影響スルコト多カラサル可シ、故ニ幕府ハ一方ニ於テ廻米政策ヲ續行スルト共ニ、他方ニハ米ノ買占買置禁止并ニ買置米ノ賣出ヲ命シタリ。ソノ法令ノ二三ヲ摘記セハ左ノ如シ。

『當地米相庭此節高直ニ而町中及困窮候モノ有之様ニ相聞候、米買置買メハ勿論他所又ハ船ナトニ米カコヒ候義一切仕間敷候、且又藏廳敷切手ニ而モ買メ置間舖事。(一月十五日)(大阪市史卷三)

『町中米屋トモ所持致居候米此節之事ニ候間最寄次第町々へ賣出シ可申候、米間屋共義平生ハ申買へ身賣渡、外賣不致候得共、是又最寄次第直賣仕候様可仕候武士方扶持米ナト受ケ合居候者ハ格別、此節米圍ヒ買候モノ在之候ハハ町中ヨリ可訴出候、吟味之上其米取上ケ公儀ヨリ御拂可被仰付候。(二月)(徳川禁令考、徳川十五代史)

『當時北國米モ段々入津候得共、未米穀拂底ニ候間町中之モノトモ日々入用之扶持方米相調候外、先達而申付置候通、買置米等仕間舖候此旨ニ郷町中へ可申聞候。(四月)(大阪史卷三)

『此間米相場上リ候ニ付、此以後段々高直ニ可成ト存買置米仕間敷候、若相背米屋ハ勿論誰ニテモ買置米仕候モノ有之儀及承候ハハ早々可申出候詮議之上急度可申付候。(五月)(徳川禁令考、徳川十五代史)

(ロ) 醸造制限。酒ニ對スル徳川幕府ノ政策ハ或ハ質素禁欲主義ニ基キ、節酒若クハ禁酒ノ方針ヨリソノ醸造ヲ制限シタルコトナキニアラスト雖、又他ノ一面ニ於テハ米價調節ノ目的ヨリシテコノ舉ニ出テシコト少カラサル也。蓋酒ノ醸造ハ必ス米穀ノ消糜ヲ伴フノミナラス、食用米以外ニオケル米ノ最大ノ需要ハ即チ酒ニ存シタルカ故ニ、幕府ハ屢酒ノ醸造ヲ制限シ以テ食用米ノ供給力ヲ大ニシ、ヒイテ米價ノ調節ヲ計レル也。醸造制限ハ既ニ寛永十一年ノ頃ヨリ行ハレ、其後屢繰返サレシカ、享保十六年ノ米價低安ナリシ際ニハ、

『今年ハ酒屋トモ方へ酒作米多ク買取ヘキ所、却テ買入無數候間隨分石高多買取酒作可仕事』
ト令シタルニ反シ、享保十八年一月十六日ニハ、

此節米穀高直ニ候所當地酒屋トモ春酒造ノ米賣込候段相聞候、米高直ニ而諸人難義之時節ニ候間今日ヨリ春酒造之義今半ハ相
止可申候、買込置候米之分、常月中ニ白米迄モ不殘早々賣拂可申候、若隱置酒造候モノ相聞候ハハ急度可令沙汰候條、酒屋組
合之人數相互ニ遂吟味猶又奉行司相廻リ左標之義無之様ニ可申付候。(大阪市史卷三)

ト令シ二月四日ニハ大阪、奈良、伊丹、鴻池、池田邊其外酒造候處ヨリ北國米廻リ候節米可買取
旨申候共酒造米ニハ一切賣ルヘカラサル旨ヲ觸知シ、更ニ六月朔日ニ至リ、

北國米段々廻若井麥作モ出來候得トモ今以米穀高直ニ付先達而觸候通、買置米之儀ハ勿論此節酒造ニ買入候義モ仕聞敷候、若
相背候モノ有之候ハハ吟味之上急度可申付事。但先達而モ相觸候通、酒造候所々ヨリ可買取旨申候トモ酒造ニハ賣申間敷事。
(大阪市史卷三)

トテ前述ノ命令ヲ繰返セシカ如キ何レモ之ニヨリテ食用米ヲ増加シ以テ米價ノ引下ヲ計ラントセ
シニ外ナラサル也。

(註) 酒造制限ノコトハ徳川時代ノ初期ニ於テモ履行ハレタル所也。寛永、萬治、寛文、延寶、天和、貞享、元祿、寶永等ノ各
年間ニソノ例多シ、今一之ヲ舉ケス。又徳川幕府ノ酒ニ對スル政策及ヒ釀造制限等ニツイテハ拙稿伏見造酒株仲間(京都法
學會雜誌第九卷八號)ニ論シオケリ。ソノ中寛永十九年五月二十六日ノ令ヲ以テ釀造制限令ノ嚆矢ナルカノ如ク説キンハ誤リ
ナリ、既ニ寛永十一年十二月ニ酒造制限ノ令アリ。(徳川十五代史第三編一八五頁參照)

(ハ) 官米拂下。幕府ハ更ニ前後二回ニ亘リテ米一萬石ヲ低價ニ拂下ケタリ。ソノ第一回ハ三
月十二日ニ行ハレ、當時米直段一石七十五匁六分ナリシカ、二十日ヲ低下シ五十五匁六分ニテ五
千石ヲ三郷町中ニ拂下ケ、ソノ第二回ハ四月十七日ニ八十六匁六分ノ相場ナリシヲ二十日低下シ
テ六十六匁六分ニテ五千石拂下ケタリ。但、町中ニ住セル米問屋、米仲買、搗米屋ハ之レカ拂下
ヲ受クルヲ得ス。ソノ他ハ家持へ六步役割、借家人へ四步役割ヲ以テ買受クルコトヲ得シメタリ
(尊商伊助
筆記卷一)。由是觀此コノ官米拂下ハ單ニ米價ノ低下策タルノミナラス、各家日常ノ食用米ヲ低廉ニ

供給シ以テソノ生活難ヲ幾分緩和セントスル目的ヲモ有セシカ如シ。

右ノ外或ハ窮民ニ施米ヲナシ或ハ濠河ノ浚渫工事ヲ起シテ土砂運搬ノ男女ニ賃錢ヲ與へ、以テ生活難ヲ救ハントシタルコトアレトモ、此等ハ米價調節ノ目的ヲ有スルモノトハ認ムルコトヲ得サル也。

以上ノ如ク或ハ廻米ノ増加ニヨリ又ハ買置米ノ賣出、官米拂下ニヨリテ積極的ニ米ノ供給ヲ大ニシ、或ハ醸造ヲ制限シ買占ヲ禁シ以テ消極的ニ食用米量ノ減センコトヲ制シ、兩者相俟チテ米價ノ引下ニ努メタルモ而モ尙米穀拂底ノ聲高ク諸人ノ困窮益甚シカリシガ、十八年秋ヨリ諸國豐饒トナリ十九年二十年打續キテ好熟ナリシカハ米價頓ニ下落スルニ至レリ。今參考ノタノ十七年來ノ米價ヲ擧クレハ次ノ如シ(三貨圖彙(物價部))

	十七年一月	十七年十二月	十八年十二月	十九年十二月
廣島米	三九・七一四〇・〇	七六・〇一九〇・〇	四六・〇	四〇・〇—三一・〇
德前米	三八・五—三九・〇	八一・五—一〇〇・〇	四五・〇	四六・〇—三六・〇
中園米	三六・三—三七・〇	七三・〇—九〇・〇	三八・〇	—

第三章 享保二十、二十一年ノ米價引上策

米價ハ十七年ノ凶作ニヨリテ暴騰シタルニ、十八年秋以來ノ豐作ニヨリテ急轉直下シテ又々暴落ヲ告クルニ至レリ。十八年十月ニハ買置米禁止令ヲ解除シタルモ、米相場ニハ多クノ影響ヲ與ヘス、米價引續キ下直ナリシヲ以テ土農階級ノ苦ムコト甚シク、幕府ハ又米價引立ノ方策ヲ廻ラサザルヲ得ザルニ至リ、遂ニ二十年十月五日米價法定ノ策ニ出テタリ。

(イ) 米價ノ法定。凡ソ營業ノ自由ヲ以テ原則トセル現代ニアリテハ公力ヲ以テ貨物ノ價格ヲ制限スルカ如キハ政府ノ專業ニ屬スルモノノ外、容易ニ見ルコトヲ得サル現象ナレトモ、保護干渉ノ政治ヲ旨トシ重要ナル産業ニ就テハ多ク株仲間ヲ組織シテ法制的獨占ヲ許容シタル徳川時代ニアリテハ物價ニ干渉シテ之ヲ限定シタルコト少カラス。米價ニツイテハ前後約二回ノ干渉ヲ行ヒシカ如シ。一ハ明曆三年ニシテ、他ハ享保二十年ニ行ヘルモノ是レ也。

(註) 明曆三年一月十八日火ヲ失シ遂ニ江戸市中四分ノ三ヲ烏有ニ歸セシメシガ幕府ハ同日二十一日一時ノ策トシテ府下ノ米價ヲ法定シ一兩二七斗ヨリ高ク賣ルヘカラサル旨ヲ令シ、更ニ同日二十四日八町郷ニ於テ金一兩二八斗ノ割ヲ以テ官米ヲ抛下ケ以テ米價ノ騰貴ヲ抑制センコトヲ期セリ(徳川實記)。右ノ米價制限ハ米價引下策トシテ、行ハレタルモノナレトモ、茲ニ述フル享保二十年ノ米價法定ハ引上策トシテ行ハレタルモノ也。

享保二十年十月四日ノ令ニ曰ク(三貨圖彙、葦島舊記、吹簾錄、徳川禁令考、
徳川十五代史、靈教類典、古事類苑、大阪市史卷三)

一、米直段次第ニ下直ニ相成武家并百姓雜儀之事ニ而町人諸職人等ニ至迄、商ヒ薄ク、カセキ事無之、世間一統之困窮ニオヨビ候間、當冬ヨリ江戸大阪米屋共請國柳米江戸ハ金一兩ニ付、米一石四斗以上ニ買請、大阪ハ米一石ニ付銀四十二匁以上ニ買請可申候、若右直段ヨリ以下ニ買請申ニオ非テハ當月十五日ヨリ米一石ニ付銀十匁ツツ之運上、買請候米屋共ヨリ差出可申事。但、惡米ハ運上不差出正米直段ニ准、相應ニ可買請候萬一正米ヲ惡米之由中マキラカシ、下直ニ買請候ハハ是又賣主ヨリ急度可申出候吟味之上可相替候事。

- 一、當十月十五日ヨリ買請米高賣渡米高一ヶ月切ニ月計町奉行所ニ書付差出、運上ハ賣渡候月ヨリ中一ヶ月價ニ可相納事
- 一、金一兩米一石四斗以上ニ買請候ハハ不及運上候、尤賣直段ハ買請直段ニ應シ勝手次第タルヘキ事
- 但、賣直段ヨリ買請直段各別下直買請候ハハ、遂吟味可相替事
- 一、右運上申付候儀、此筋斗心得、十分ニ買入サル儀モ可有之哉、米直段不宜内ハ何々牟モ運上申付候間丈夫ニ直段買上可申事

一、運上差上候付而萬一買請不申米屋有之候歟、又ハ邪曲ヲ以テ紛數儀仕ニオ非テハ米賣主ヨリ早々町奉行所へ申出ヘシ。吟味之上急度可申付候。若不申出者有之、後日ニ相知候ハハ是又曲事タルヘキ事。

二、江戸大阪米直段宜相成候トテ近國ヨリ例年ニ替リ俄ニ米高多積廻シ申間敷事。

一、大阪ニテハ米切手賣之儀モ右前相心得、例年ニ替リ米高多一度ニ切手差出シ申間敷事。

一、右之通ニ而江戸大阪米直段宜成候ハハ、右准シ諸國共ニ米直段宜賣買可仕候事。右之通急度相心得、米賣買可仕候。

今右ノ觸達ヲ見ルニ米穀賣買ノ最低價格ヲ限定セルノミナラス、賣買ノ數量ヲ届出テシメ、違反者ニハ十匁ノ過料ヲ科シ、且ツ米價引立タサルニ於テハ何ケ年モ運上申付クヘシトイヒ、買米ヲ差控フルコトヲ豫防スルナドソノ用意ノ周到ナルヲ見ル也。然ルニ右ノ制令ハ江戸ニテハ河岸八町ノ米商ニ對セシモノナリト考ヘラレ他ノ米商人及素人ニシテ右ノ規定ニ從ハサルモノアリシヲ以テ、同年十一月十四日再ヒ、

『先達而米定直段相觸候以後脇々之米屋エ品ヲ付、下直州拂又ハ金子代リニモ米下直ニ相渡候而々有之由相觸候。河岸八町之米屋共ニ御定直段之通拂候得ハ勝手ニモ可罷成候。脇々ニ相對ナリ以糞ニ相拂候テハ米直段障候間自今河學八町之者ニ賣渡候様可致候』(徳川禁令考、靈教類典、徳川十五代史)

ト令セリ、又大阪ニ於テハ米商人等相議シ、(三貨)

『上下ノ米直段ハ相分リ有之候得共、國々ノ内米ニモ上中下三段有之、其中下々米ハ差除キテ三段トタテ候テ、此中米ハ上米ニモ買受カタリ、下米ニテモ無之、然レハ中米ヲ買受候ア上米ノ直段ニハ買受カタリ、是非上米ヨリ直段劣リ候義勿論ニ御座候然ルチ上米ヲ引キアテ直段安ク買受候トテ運上差出シ候テハ甚迷惑仕候故、中米ノ議ハ上下ノ米ノ直段ノ内ヨリ其米ニ應シ賣買致度、左候得ハ中米買受候義ハ上米ヨリ直段劣リ候アモ此運上差出シ難キ』

趣歎訴ニ及ヒシニ幕府乃チコレヲ容レ、十一月十五日、

『大阪ニ而ハ上米一石ニ付銀四十二匁以上、下米ハ一石ニ付三十九匁以上、中米ハ上米下米直段ノ間ニ賣買可致候』(大阪市史卷三)

ト申渡シ、又江戸相場ノ分ニ對シテモ、

『先達而相觸候通金一兩ニ米一石四斗以上ハ上來之相場ニ致シ下米ハ一石五斗以上ニ買請、而様共右直段ヨリ下直ニ買請候ハハ先達而相觸候通運上米屋ヨリ可指出候。中米ハ右上來一石四斗以上、下米ハ一石五斗以上之直段之内ニ而、其米ニ應シ賣買可致候間運上差出候義無之由米屋共願出候ニ付願之通申付候間拂米等其心得可有之候。』(徳川禁令考、吹塵録、大阪市史卷三)

ト令シ、米價ハ一層精細ニ定メラルルコトナレリ。幕府ハ右ノ如ク種々ノ布令ヲ發セシモ、利ニ敏キ市井ノ商人ハ來春ニ至ラバ米價自ラ下落スヘク、或ハ御定直段モ暫時ノ後ニハ廢セララルヘキヲ以テ、今直ニ米ヲ買入ルルトキハ甚シキ損失ヲ蒙ルヤモ計リ難キヲ慮リ、米ハ甚タ不捌ニシテ米價一向ニ引立タスココニ於テ幕府ハ更ニ法定價格ヲ改メ、其後數次ノ改正アリ。(徳川禁令考、吹塵録、大阪市史卷三)

	二十年十月五日	二十年十二月六日	二十一年一月四日	二十一年三月十二日
江戸(金一兩ニ付キ)	上米 一石四斗以上	一石三斗五升以上	一石二斗五升以上	一石二斗以上
	下米 一石五斗以上	一石四斗五升以上	一石三斗五升以上	一石五斗以上
	下々米 銀四十二匁以上	四十三匁五分以上	四十八匁以上	四十八匁以上
大阪(米一石ニ付キ)	上米 (上下米ノ中間)	(上下米ノ中間)	四十五匁以上	四十三匁以上
	中米 三十九匁以上	四十匁以上	四十二匁二分以上	三十八匁五分以上
	下米 三十九匁以上	四十匁以上	四十二匁二分以上	三十三匁以上
	下々米			

備考 一、江戸大阪共ニ中米ハ米質ニ應シ上來下米ノ間ニテ賣買シ運上不用ナリシガ、其後大阪ニテハ第三回目ヨリ中米直段ヲ限定シ、ソレ以下ニテ賣捌クトキハ運上ヲ徵スルコトトセリ。

二、下々米トハ『惡米ニテハ無之候得共、米性惡、糶米等ニ相捌候米』ヲ云フ。

右ノ改正ニ於テ注意スヘキコトハ法定價格カ次第ニ高價トナレルコト是レ也。蓋最初ノ御定直段ニ於テ渺々シク米商買入ヲナサザリシタメ、更ニソノ價格ヲ引上ケ商人ヲシテ若シ尙躊躇セハ法定價格ハ次第ニ昇ルヘク、此際迅速ニ多量ヲ買入ルルノ利ナルヲ思ハシメ、以テ豫期ノ效果ヲ收メントシタルモノナレトモ、ソノ計畫齟齬シ遂ニ數回ノ改正ヲ見ルニ至レル也。而シテ上中下ノ區別ニ至リテハ未タ詳細ノ定メナカリシガ、二十一年ニ至リ畿内、播磨、備前、備後、淡路、中國、豊前各米ヲ上米トシ、肥後、筑前、筑後、讃岐、廣島ヲ中米トシ、加賀、出雲、北國、土佐、豊後、肥前、薩摩ヲ下米ト定メタリ(三貨圖彙)。

而シテ右ノ如キ米價法定策カ嚴重ニ勵行セラレタリヤ否ヤ頗ル疑ハシキモノアリ。幕府カ米穀京都輸送ヲ業トセル上問屋ノ定員ヲ二十一人、上積米屋ノ定員ヲ十二名トシ、該地方ヘ米穀ヲ輸送セント欲スル者ハ必ス之ニ依頼セシメ、又三郷市中ニテ白米ヲ小賣セル搗米屋、駄賣屋ニモ紐合ヲ結ハシメ、組合員以外ニテ同業ヲ營ムコトヲ禁シ、以テ密ニ米穀ヲ賣買シテ法ヲ犯ス者ヲ取締ルノ目的ニ具ヘ(二十年十二月)、ソノ取締ニカマル所アリシモ嚴守セラレサリシモノノ如ク、二十一年二月ニハ、

『河岸ニテ鵜居米屋日々買米并素人買米少ク飯米入用ノ米高モ大概相知有之處買高少キ儀ハ御定直段ヨリ安ク内證賣買有之風説ニ而候。左様有之候得ハ不届ノ至ニ候、此以後段々乞吟味候間左様ノ儀堅仕同數候、若シ内證賣買致候者有之ニ就テハ早速可申出、若隱シ候、後日ニ相知レ候ハ其當人ハ勿論組合ノ者迄急度申付候事』(取引所投機取引論)

ト令セシカ如キノノ消息ノ一端ヲ洩セルモノニハ非ルナキ乎。思フニコレノ法定價格ヲ勵行セントセハ、一方ニ於テ米ノ供給者カ強硬ナル態度ヲトリ、法定價格通りニアラサレハ一粒ヲモ供給セ

ストノ意氣込ヲ以テ消費者ニ臨ミ他方ニ於テ幕府ハ敏速ニ且嚴密ニ取引ヲ監督スル所ナカル可ラス。然ルニ米ノ供給者殊ニ各藩ニアリテハンノ財政上ノ疲弊ヨリ、カクノ如キ強硬ナル態度ヲ持スルコトヲ得ズ、成ルヘク速ニコレヲ賣拂ヒテ金錢ニ代フル必要ニ迫ラレ、又上述ノ如ク當時ノ幼稚ナル行政ノ下ニアリテハ、取引ニ對スル監督モ到底完全ニ之ヲ望ムコトヲ得サルカ故ニ、米價法定ノ勵行セラレサリシハ已ムヲ得サル處ナル可シ。

今假リニ法定價格取引ノコト嚴重ニ實施セラレタリトセハ、如何ナル影響ヲ齎スヘキヤト云フニ、コレニヨリテ米價ハ騰貴シ從テソノ消費ヲ減スルノ結果ヲ生スヘシ。然レトモ供給ニ於テ一割ヲ減スルモ米價ハ二割乃至三割ノ騰貴ヲ示スコトヲ常トスルカ故ニ、結局土農兩階級者ハコレカタメソノ供給ヲナスコト從前ヨリモ少クシテ、却テ代金ヲ收ムルコトハ從前ヨリモ多額トナリ、貨幣所得ヲ大ニスルノミナラス、更ニ飯米トシテ多量ノ米食ヲナスノ餘地ヲモ生スヘキ也。然レトモ米價調節ノ一方法トシテ米價ヲ法定スルコトハ必ズシモ適當ナルモノニハアラス。却テソノ調節ヲ阻害スルニ至ルヘキ原因ヲ包含セルカ如キ感アリ。コノコトハ二十一年四月十六日ニ堂島仲買人ヨリ願出タル御定直段廢止ノ歎願書ヲ見ルモ明カ也。今ソノ理由ヲ述ヘンカ、米價ヲ法定シテ當時ノ相場ヨリモ高價ニ取引ヲナサシメトシタル結果、賣買ノ範圍頗ル狭小トナリ他國商人ノ入込ム者ナク、取引ハタタ大阪仲買人カ當座ノ入用米ノミヲ扱フニ過キサレコトトナリシニ反シ、他方供給ノ方面ニアリテハ販賣ノ活潑ナラサルタメ古米ノ殘存セルモノ多キニ加ヘテ、北國西國等ノ新米モ次第ニ入津シテ著シクソノ量ヲ増加シタリ。然ルニ又一方ニ於テハ不捌ニヨル持米ニハ變質、斛減、虫害等ノ損失ヲ生シ、到底法定價格通りニ多量ヲ賣捌クヘキ望ナク、若シ割

引シテ賣捌クトキハ却テ運上ヲ負擔セサル可ラサルコトトナリ、御定直段ノ弊害ハ二重三重ニ現ハレ米價低落ノ原因ヲ形成スヘキモ到底ソノ騰貴ヲ策スルコト能ハサル也。若シ御定直段ニシテ全廢セラレ、ソノ取引ヲ自由ニ放任センカ、他國商人トノ取引モ盛トナリ、藏屋敷拂米モ滞リナク取引セラレ、結局米穀ノ需給ヲ投合シ米價ハ自然的ニ適當ナル地位ニ復スヘキ也。(壹島米仲買歎史卷三、三七頁以下)米仲買人ノ歎願ハ幕府ノ容ルル所トナラサリシト雖、五月十二日ニ至リ賣買双方ヨリ取引ノ石數及ヒ直段ヲ届出ツルコトヲ廢セリ。思フニコノ届出ノ廢止ハ結局法定價格取引ヲ強制スルカヲ失ヒ、御定直段ノ實行ハ益不可能ノコトトナリ、六月朔日遂ニコノ御定直段ヲ全廢シ、米ノ取引ヲ自由ナラシメタリ。(三貨圖彙 大阪市史)

(四) 米買請人拜借金。米價法定ノアリト雖末タ米價引上ノ目的ヲ達スルヲ得ス。茲ニ於テ幕府ハ更ニ種々ノ方法ヲ案出セリ。米買請人拜借金ハ即チ其一也。二十年十二月五日ノ令ニ曰ク、

一、今度米賣買元直段相定、右種ヨリ直段セリ上候儀者商人共勝手次第タルヘキ旨申渡候處、當分致シ馴サル事故米之捌ケ不宣候ニ付間座四人申買之者之内拜借金申付……然ル上ハ相勵米直段買立可申處、少々宛ナラデハ買取不申故直段モ居リ相見ヘ候事。

一、拜借金申付候者共ハ不及申、其外之米商賣之者トモ來春ニ至リ米直段下リ可申哉、又者元直段之定、後ニハ相止可申歟ト大阪表之風説ヲ承リ傳ヘアキノミ、例之通買込不申様ニ相聞ヘ不届千萬ニ候、タトヘ米捌方不宣候共日日之入用程ハ無滞相捌候、然者此定相止申事曾而無之儀候云々。(徳川禁令考徳川十五代史)

右ノ文面ニヨリテモ明カナルカ如クコノ拜借金ナルモノハ前述ノ凶作地方ノ諸侯ノ困窮ヲ救ハンカタメニセル拜借金ト異リ、米商人ニ資金ヲ融通シ以テ盛ニ米ノ買入ヲナサシメンカタメニ外ナラサル也。大阪市史ニ「御觸帳」ヲ引用シテ説ケル所(大阪市史第三卷、三六七頁)ニヨレバ、

「當地大和屋三郎左衛門、泉屋吉左衛門、平野屋五兵衛、辰巳屋久左衛門、此四人ノ者トモヘ御拜借銀被仰付、當十九日二千六

町買目、同二十一日二千六百買目、都合三千二百買目請取申候由」云々

トアレトモ、ソノ融通ノ方法、條件及ヒソノ結果等ニツイテ未タ詳細ニ知り得サルヲ遺憾トス。然レトモ米買入ノタメニ貸付ケタルモノナレバ之ヲ他ノ用途ニ使用セサルコトヲ條件トシ、且ツ之ヲ強制スルノ方法ハ具ハリシナラン。

(六) 廻米制限、同シク十二月五日ノ令ニ曰ク

『例年夏中江戸大阪北國、奥州邊之米入津候。今半豐年ニテ來春中近國之米過半不相割内、右遠國之米入津候テハ差支可申ト令評議、一度ニ入津不致様ニ近日相觸候間、萬一其上ニモ藩儀有之候共米屋共少モ損失不致様ニ奉行共作略致可遣候間、來年中ハ石一兩ニモ可及候條其旨可相心得事』(徳川禁令考、徳川十五代史)

ト而シテ翌二十一年一月二十一日更ニ次ノ如ク令セリ。(大阪市史、卷三、三六八頁)

『例年大阪へ出羽奥州、北國之米四月頃ヨリ入津賣買イタシ候得共、當年ハ六月ヨリ入津ノ筈ニ候、併此上之義越速難計可有之候間、若六月以前ニ大阪へ着船候トモ正米并切手トモニ賣買ハ六月ヨリ可仕候。江戸ニ而賣買之儀モ右之通ニ候事』。

即チ端境期ノ頃マテ遠國米ヲ賣捌カシメズ、以テ米價ヲ騰貴セシメントスルノ趣意ヲ見ルヘシ。

(三) 買米令。幕府ハ以上ノ外尙同二十年十二月二十五日ニ至リ堂島市場ニ藏米十三萬石ノ強

制買請ヲ命シ、尙前年ノ例ニヨリ大阪市中町々へ買米ヲ令セリ(享保二十一年三月)其買入高ハ北組四萬三千

石南組三萬九千石天滿組九千石ニシテ、外ニ個人トシテノ買米モコレアリト云フ。(章聞伊助筆記)

幕府ハ以上諸種ノ方法ヲ探リシガ、ソノ中心點ハ蓋米價ノ法定ニ在リ。然ルニ前述ノ如ク米價法定策ハソノ實行困難ニシテ所期ノ目的ヲ達スルコトヲ得ス。遂ニ廢止セララルニ至レリ。カクテ米價引上ノタメニセル方策ハ何レモ十分ナル效果ヲ收ムル能ハサリシカ如シ。

享保二十一年四月二十八日ヨリ改元シテ元文トシ、金銀貨ヲ改鑄シ、新金銀貨(文字金銀)ヲ以

テ相場ヲ定ムルコトトセシガ、ソノ品質粗惡ニシテ一般物價騰貴スルニ至レリ。米價干涉事略ニ
(日本及日本人
 五九〇號以下)ニ曰ク

『干涉ノ精神タル相場(御定直段)ヲ廢スルニ至リシハ吾輩ノ信スル所ニ據レハ御定直段ナルモノノ到底眞ノ救濟策ニアラス、
 眞ノ救濟策ハ他ニ之レアルコトヲ見出スニ至リシ故ナルヘシト思フ。所謂眞ノ救濟策ナルモノハ他ナシ。貨幣ノ改鑄ニシテナリ。
 元祿八年貨幣ヲ改鑄シテ下劣トナシタル後、物價ノ變動甚シカリシカハ家繼ノ末年其復舊ヲ企テ、粗ホ端緒ヲ得、吉宗之ヲ繼
 承シ、享保金銀ノ改鑄ヲ全クセリ。然ルニ爾來米價下落ノ傾向ナ生シ腐心百端遂ニ享保金銀ノ改鑄ヲ企ルコトナレリ。是レ
 元文元年ノ事ナリ。世之レチ文字金銀ト云フ。文字金銀ノ品位ハ其享保金銀トノ引替割合ヲ以テ知ルヲ得ヘシ。即チ享保金百
 兩ニ付文字金百六十五兩、享保銀一貫目ニ付文字銀一貫五百目……カクノ如ク貨幣ノ品位ヲ賤劣ニシ其數量モ享保金八百二
 十八萬兩ニ對シ、元文金千七百四十三萬兩ヲ鑄造セリ。六月ニ至リ御定直段ヲ全廢シ、米ノ取引勝手次第トシ、一切ノ束縛ヲ
 解放シタリ。是ヨリ米價漸ク上向トナリ、元文二年大阪ノ初相場廣島米六十八匁ヨリ七十一匁、元文三年ハ諸國少シク凶作ナ
 リシヲ以テ十二月中國米七十六匁三分、筑前米八十七匁八分、廣島米八十七匁七八分トナル。兎ニ角貨幣ノ改鑄ハ米價引立ニ
 カアリシコト爭フ可ラス』

ト。然レトモ貨幣品位ノ賤劣トナリ且ツソノ數量ノ増加シタルタメ物品價格ノ騰貴スヘキコトハ
 一般物價ニツイテ之ヲ見ルモノニシテ、獨リ米價ノミカ引立ツニハアラス。米價ノ騰貴スルト共
 ニ他ノ物價モ亦騰貴スヘキモノナレハ、コレヲ以テ米價調節ニ功アリトイフハ誤レリ。米價調節
 トイフ點ヨリ見レハ貨幣改鑄ハ何等ノ意義ヲモ有セサルモノ也。又相場ハ正月、五月、十月ヲ一期
 トシテ建替ヘラルルカ故ニ元文二年初相場廣島米六十九匁云々トイヘルハ何時ノコトナルヤ明カ
 ナラサルモ米商舊記ニヨレハ元文二年一月ノ廣島米相場四十五匁五分(文字)、三年正月、四十九匁
 八分ナレバ(大日本貨幣
 史參考所引)、之ヲ米價法定前、暴落ノ初期ナリシ享保十八年十二月ノ四十六匁(享保
 銀)

ニ比スルニ享保銀一貫目ニツキ文字銀一貫五百目ノ計算ニヨルトキハ米價ハ却テ下落セルモノト云フヘク、又之ヲ十九年十二月ノ最低價三十一匁(享保銀)ト比スルモ、元文二年一月ノ廣島米四十五匁五分(文字銀)ハ尙一匁ノ差アルヲ見ル也。又元文三年十二月ノ廣島米相場カ八十七匁八分ニ騰貴シタルハ諸國米穀不實ノタメニシテ、コノコトハ論者モ亦認メラルル所也。然ルニ之ヲ貨幣改鑄ニ比附スルハ何ソヤ。要スルニ享保二十年、二十一年ノ引上策ハ多クノ效果ヲ奏スルコトヲ得サリシカ如ク、貨幣改鑄ハ米價調節ノタメニ行ハレタルモノトハイフコトヲ得ザル也。

結 言

以上享保年間ノ米價調節ニツイテソノ大要ヲ叙シ終レリ。ソノ論スル所米價調節ノ方法ヲ列舉セシニ止マリ、詳細ニ米價ノ高低、變動ノ狀況ヲ知悉スルヲ得サリシコトヲ遺憾トスト雖、以上述ヘタル所ヲ綜合シテ考フルニ(一)徳川時代ノ行政政策カ保護干渉ノ色彩ヲ帶フルコト強烈ナルカタメ、今日ニ於テハ到底行フ可ラサルカ如キ方法モ、當時ニ於テハ屢實施セラレタルコト。(二)米價調節ノタメニ行ヘル人爲的手段ハ必スシモソノ效果ナキニ非スト雖、到底之ニ大ナル望ヲ囑スルニ足ラサルニ反シ、自然ノ出來事、殊ニ作柄ハ豊凶ハ米價ニ甚大ナル影響ヲ及ホシ、米價ノ暴騰暴落ヲ惹起シ、忽チニシテ從來ノ人爲的手段ノ效果ヲ粉碎シ、更ニ他ノ人爲的手段ヲ講セサルヲ得サラシメタルコト少カラス。從テ自然ノ大勢ニ放任シテ甚シキ干渉ヲ加ヘザルコトガ、却テ米價ノ變動ヲ助長セス、人爲的手段ヨリ生スル反動ヲ避ケ得ルコトヲモ考ヘサル可ラザルコト(三)徳川時代ニオケル米ノ政治財政上ノ地位カ現今ト大ニ趣ヲ異ニセルカタメ、ソノ調節策ニツイテモ政治的色彩ノ強烈ナルコト等ハ之ヲ認ムルニ難カラサル也。(完)